

御笠川における重要視点場の同定とそれに基づく修景案の試み

九州産業大学工学部 正 員 山下 三平
九州産業大学工学部 学生員 〇宮崎 弘樹
九州産業大学工学部 大津 和弘

九州産業大学工学部 織田 浩嗣
九州産業大学工学部 溝田 憲史
九州産業大学工学部 林 栄二郎

1. 序論

近年、都市河川環境の改善を望む社会的要請の高まりに対応し、親水性や景観、環境に配慮した整備が数多く見られるようになってきた。

しかし、それらの整備が人々の要請に応えられているかどうかの検討は不十分な段階にある。

そこで本研究では、沿川住民が河川環境を利用する目的と頻度を観察し、親水性、多様性を考察しながら、その河川における重要視点場を同定して、都市河川環境(御笠川)の修景案を提示することを目的とする。

2. 調査方法

太宰府市に源を発し、大野城市、福岡市を貫流して博多湾へと注ぐ都市河川である御笠川を対象に人々の河川空間の利用行動の観察を行った。

観察は、各河川、河口から上流までを幹線道路、鉄道などを境界として、21の区間に分類して行った(区間総延長19.32km)。

観察の日時は、平日と休日で利用目的、利用者数に変化すると予想されるため、1995年8月20日の日曜日と同年8月25日の金曜日の2日、午前6時から午後7時まで(13時間)とした。

本報では、御笠川の21区間のうち上流の三条疎水から牛瀬川合流地点までの9区間(7.65km)(図-1参照)を観察し、その重要視点場所を同定した。

3. 結果と考察

9つの区間ごとに利用目的別の頻度を示すと、表-1および表-2のようになる。

これをもとに、河川空間利用の多様性と頻度の観点から曜日別にそれぞれの区間を分類すると以下のようになる。

なお、利用が「多様」であるとは、観察した19の目的のうち25%以上(5項目)がみられたものと定義し、「頻度が高い」とは、区間の中での100m当たりの頻度が15人以上のものと定義した。

1) 利用目的が多様で頻度が高い区間。

日曜日：区間①、⑦、⑧、⑨

金曜日：区間①、⑦、⑨

2) 利用目的が多様であるが、頻度が高くない区間。

日曜日：区間④

金曜日：区間②、③、④、⑧

3) 利用目的が多様でなく、頻度が高い区間。

日曜日：区間⑥

金曜日：区間⑥

4) 利用目的が多様でないが、頻度が高くない区間。

日曜日：区間②、③、⑤

金曜日：区間⑤

以上の結果から、とくに注目すべき点は、区間②は利用目的が多様で頻度が高い区間①と隣接している区間であり、目的については多様であるものの

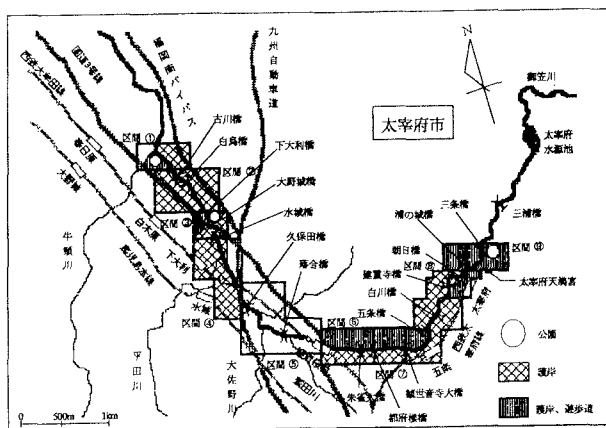


図-1 観察区間の概要

表一 区間および目的別利用頻度 (1995年8月20日(日))
(100m当たりの人数)

	区間	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	小計	合計
	区間距離(m)	600	450	450	900	2100	300	525	1725	600		
目	移動歩	14.7	2.4	1.6	2.8	0.1	3.7	10.3	3.7	4.8	44.0	171.0
	動通行(通勤、通学)	1.3			0.2		10.3	20.2	37.9	51.2	121.2	
	ジョギング						2.3	1.7	0.2	0.3	4.6	
	サイクリング	0.5						0.4		0.3	1.2	
	水泳水遊び	1.5		2.2	0.7				0.1	0.7	5.2	28.7
	釣り	1.2	1.6		4.0	1.8			0.1		8.6	
	潮水生生物採集	1.5			0.6						2.1	
	昆虫採集				0.3						0.3	
	写生写真撮影	0.5									0.5	
	在休操										0.0	
	球技	1.3									1.3	
	休憩	0.5		1.1	3.4					1.2	6.2	
	型清掃				0.4	0.0		0.2		0.5	1.2	
	風景鑑賞									1.2	1.2	
的	ピクニック、飲食									0.5	0.5	
	水遊び以外の遊び									1.7	1.7	
	道具、物洗い										0.0	
	ゴミ捨て、焼却										0.0	
	待ち合わせ										0.0	
	小計	23.0	4.0	4.9	12.4	2.0	16.3	32.8	42.0	62.3	199.7	199.7

牛頭 ← 全長 = 7 6 5 0 m → 三輪

注: 〇は1から9の区間内で最も多い所を示す。

表二 区間および目的別利用頻度 (1995年8月25日(金))
(100m当たりの人数)

	区間	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	小計	合計
	区間距離(m)	600	450	450	900	2100	300	525	1725	600		
目	移動歩	10.7	3.1	0.2	1.9		6.0	7.0	4.5	2.2	35.6	156.2
	動通行(通勤、通学)	6.5			0.1		28.3	24.0	9.0	50.0	117.9	
	ジョギング						0.7	1.5	0.2		2.4	
	サイクリング	0.3									0.3	
	水泳水遊び	0.3	0.7		1.0	0.8			0.1	1.0	3.9	32.2
	釣り	0.2	2.0	0.2	2.9	0.8					6.3	
	潮水生生物採集	0.3			0.7				0.1		1.1	
	昆虫採集							0.2	0.2		0.4	
	写生写真撮影										0.0	
	在休操	0.5			0.2						0.7	
	球技	1.5		1.3							2.8	
	休憩	4.7	2.0	1.3	1.7					0.7	10.3	
	型清掃	0.2	1.3		0.3				0.2		2.1	
	風景鑑賞		0.2						0.3	0.3	0.8	
的	ピクニック、飲食									1.0	1.0	
	水遊び以外の遊び		0.4	0.4						1.3	2.2	
	道具、物洗い			0.2							0.2	
	ゴミ捨て、焼却							0.2			0.2	
	待ち合わせ	0.2									0.2	
	小計	25.3	9.8	3.8	8.8	1.6	35.0	33.0	14.7	56.5	188.4	188.4

牛頭 ← 全長 = 7 6 5 0 m → 三輪

注: 〇は1から9の区間内で最も多い所を示す。

(金曜日)、頻度が高くなく、河川利用の連続性が欠けていることである。

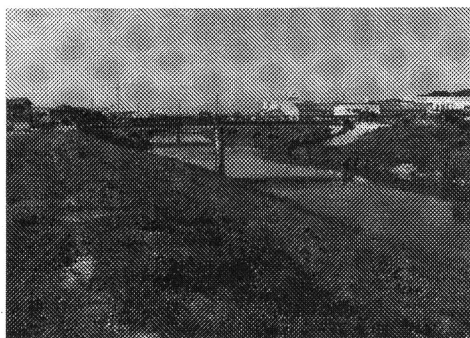
この区間②は、自然が多く残っているがゆえに、多様な目的で利用されているものの、区間①と比べて、散歩や通行や休憩などの風景を楽しむことのできる利用に関して難がある。

そこで、以上の点を考慮して、自然を残しつつも、その修景を試みるとすれば、さりげない遊歩道を施すだけで基本的に十分であり、その様子をせば図一2のようになる。

4. おわりに

本研究では、人々にとって望ましい河川環境のあり方を追究するために、都市河川である御笠川を対象として、沿川住民が河川環境を利用する目的と頻度を平日(金曜日)と休日(日曜日)の二日にわたって観察した。そして、その重要視点を同定し、河川環境の修景案を提示した。

今後の課題としては、観察を行った2日分のデータを時間ごとに分析し同様の分析と修景案の検討をさらに詳細に行っていく予定である。



修景前

図一2 区間②の修景案

修景後